

**西日本における畿内系甕製作技術の展開**  
— 弥生時代終末～古墳時代初頭の甕製作技術の出自を中心として —

The Spread of Kinai Style Pot Making Technology  
in Western Japan

角 南 聡一郎

Souichiro Sunami

## I. はじめに

本稿では、弥生時代から古墳時代への移行過程において、特に土器製作技術にどのような変化が起こったかを西日本全体の中で検討する。特に畿内地方にその起源を持つ土器の形態と製作技術に注目する。具体的な検討を行う前にまず問題が二・三存在する。これらのうち最も重要なのは、現在一般的に言われる「畿内系土器」や「畿内系甕」とは、一体どういった定義のもとに語られているかという問題であろう。

ここでは、まず西日本各地の弥生時代終末から古墳時代初頭の甕形土器について拠点集落出土の一括性の高い資料を用いて、形態と製作技術を中心にそれぞれの地域ごとに分析を行った。次に、この分析結果をもとにそれぞれの地域の在地系の甕を形態と製作技術の双方から設定する。このことから畿内系甕を定義する。

続いて、ここでいう「畿内系甕」は西日本全域においてどのように分布するかを概観し、甕に関する情報や、甕の製作者が近畿地方のどこから各地域へと移動していったのかを考えてみたい。

これらの結果を踏まえて、弥生時代から古墳時代への移行期にどのようなレベルでの交流が、地域間で行われたかといった畿内系甕移動の背景を若干考えてみたい。

## II. 畿内系土器移動についての研究史

田中琢によって「庄内式」という、弥生時代後期第V様式と古墳時代前布留式とのさまざまな土器型式が提唱されて、はや三十年以上が経過した(田中 1965)。この間畿内での編年細分の研究の進展や酒井龍一による畿内伝統的第V様式甕の提唱(酒井 1975)とともに、注目されたのは各地域への畿内系土器、特に庄内式甕移動の現象である(阿部 1985, 置田 1982, 米田 1983)。また最近では庄内式土器研究会の活動を中心として、各地域での編年と畿内系土器との併行関係も試みられはじめた。

こうした各地の編年作業の活性化<sup>1)</sup>とは対象的に、どのような背景で畿内系土器が移動するのかという問題にまで踏み込んだ議論はあまり盛んではない。これは「畿内系」という言葉の曖昧さに起因するところが大きいと思われる。以下これまでどのように畿内系土器移動の背景が考えられてきたかを中心に振り返ってみたい。

田崎博之は筑前地方の古墳時代初頭前後の外来系土器の流入過程を検討し、その背景を海岸部の集落では近畿地方の勢力が海上交易権を掌握する過程で、内陸部の集落では限られた一部が近畿地方を中心とした外来の祭祀権と結びつく過程で外来系土器が流入すると考えた（田崎 1983）。

また寺澤薫は布留式甕の成立とその生産地を畿内大和地方に推定し（寺澤 1986）、これら布留式甕の広範な地域への拡散と顕在化の背景には、定型化した前方後円墳の成立といった、初期ヤマト政権と地域との政治的関係性と深い関係があったことを示唆している（寺澤 1987）。

溝口孝司は畿内系土器群の北部九州への進出は、畿内地方を中心とする勢力の構造拡大運動の象徴的側面の一つであるとし、北部九州におこった土器様式の構造的変動は、この地方の人々が半ば自発的に、半ば強制的に、この構造に編入されていく過程の、一つの表現形態であった（溝口 1988）と考える。

井上裕弘は北部九州に多量に流入した畿内系土器群の背景には、畿内系土器の流入が顕著な古墳時代前期のはじめでは、畿内系移住者集団の集落と思われる遺跡がかなり存在することを指摘し、畿内系集団の北部九州への頻繁な流入が想定されるとした。また、北部九州で多量に出土する、成立期の畿内布留式土器群の背景に、同じ「規範」を共有した土師器工人が北部九州にも存在している可能性を想定している（井上 1991）。

このように概観してみると、布留式甕が畿内ヤマト政権と各地域との政治的関係との関係で移動していることが想定されているが、それでは庄内式甕の移動をどのように説明すればよいのだろうか。庄内式甕の移動も大

和地方との関係で語られることが多い。しかしながら、この説は布留式甕の移動についての仮説ほど決定的な仮説がなく、近畿地方のどこから庄内甕が移動したのか不明確な部分も多い。そこで、本稿では畿内系甕のうち、庄内式甕について特に留意して議論してみたい。

### Ⅲ. 各地域における在地系甕の設定

#### Ⅲ-1 各地域間の併行関係

本稿で取り扱う地域は、近畿の一部と近畿地方より西側の地域で南九州地方（鹿児島県・宮崎県）を除く全域である。これらの地域について原則的に旧国単位で区分して論を進める。

対象とする時間幅は、弥生時代後期後半から古墳時代初頭までである。例外的に古墳時代前期までの資料を用いることもある。

これら各地域についての土器の併行関係については、本稿では基本的に庄内式土器研究会の作成した案を採用したい（表1）。

#### Ⅲ-2 分析方法

次に前節での併行関係の整理に基づき、各地域における在地系甕とはいかなる形態を呈し、またいかなる技術によって製作されているかの事実関係を整理するための分析の方法を提示する<sup>2)</sup>。

在地系甕の形態、特に全体のプロポーシオンについては前時期からの形態の強い影響下であり、且つ量的に安定し普遍的にその地域においてどの遺跡においても見られるものを抽出した。また分析対象の条件として遺構からの一括性の高い資料で、全体の形状を判断するために60%以上残存しているものに限定した。

分析の対象とした属性は、口縁端部形態と器面の外面及び内面調整である。以下その基準を明示する（図1）。

表1 弥生前末~古墳時代初期にかけての各地域層年の併行関係

九州					中国				四国			畿内		
弥生 1883	1a 1889	1b 1898	2 1892	3 1903-1904	4 1976	5 1980	6 1977	7 1990	8 1993	9 1994	10 1990	11 1989-90	12 1988	13 1976
	1	2	3	4	5	6-7a	8	9	10	11	12	13	14	15
1a	11a	11b	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1b	11b	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
1a	12a	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
1b	12b	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14

□ 弥生前末部 形状

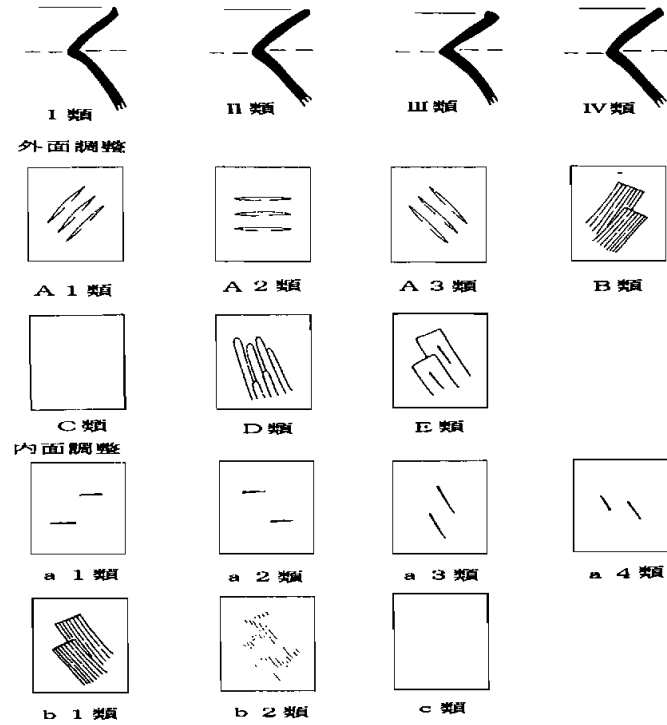


図1 形態分類模式図

**【口縁端部形態】**

- I 類 端部を垂直に摘み上げるもの。
- II 類 丸く収まるもの。
- III 類 内側へ摘み上げるか、肥厚するもの。
- IV 類 面を持って方形を呈するもの。

**【外面調整】**

- A 類 タタキ成形をするもの。さらにこれをタタキの方向から三つに細分した。
- A1 類 右上がりのタタキをするもの。
- A2 類 併行のタタキをするもの。
- A3 類 左上がりのタタキをするもの。
- B 類 刷毛調整をするもの。
- C 類 撫で調整をするもの。
- D 類 磨き調整をするもの。
- E 類 削り調整をするもの。

**【内面調整】**

- a 類 削り調整をするもの。さらにこれを削りの方向から四つに細分した。
- a1 類 左から右方向の削りをするもの。
- a2 類 右から左方向の削りをするもの。
- a3 類 下から上方向の削りをするもの。
- a4 類 上から下方向の削りをするもの。
- b 類 刷毛調整をするもの。さらにこれを二つに細分した。
- b1 類 刷毛調整のままのもの。
- b2 類 刷毛調整後撫でを施すもの。
- c 類 撫で調整を施すもの。

以上の諸属性の分類基準によって、甕を検討していくこととする。

### Ⅲ-3 在地系甕の様相

前節の分類基準で各地域出土の甕の在り方を見てみた。まず近畿地方、特に中河内地区の在地甕の在り方を検討したい。

#### 【近畿地方中河内地区】

この地区には従来から指摘されるように、弥生土器から土師器への移行過程において大別して①伝統的Ⅴ様式系、②庄内式系、③布留式傾向（初期布留式甕）の三つの甕が存在している。ここでは、これら是一体どのような特徴をして畿内の代表的な甕とされているのかを見てみたい。このことを解明するために、中河内地区（大阪市・東大阪市・八尾市）の主要な拠点集落の、一括性の高い資料を中心として分析した。この分析結果から本稿では、以下のような特徴を有する甕を所謂「畿内系」甕と定義したい（図2）。

#### ①伝統的Ⅴ様式系

対象とした甕は計46点である。上半部外面は右上がり方向のタタキを施し、内面は刷毛もしくは刷毛後撫で調整を施す。口縁部はほとんどが丸くおさまる。下半部外面は上半部同様に、右上がり方向のタタキを施し、内面は刷毛もしくは刷毛後撫で調整を施す。器形は球形か長胴気味である。底部は平底を僅かに残すものが多い。

#### ②庄内式系

対象とした甕は計133点である。上半部外面は右上がり方向の細かなタタキを施し、内面は左から右方向もしくは右から左方向の篋削りを施す。口縁部は端部を垂直に摘み上げる。下半部外面は刷毛調整を施し、内面は下から上方向の篋削りを施す。器形はやや長胴で、底部はやや尖り気味で丸底を志向する。

#### ③布留式傾向

対象とした甕は計15点である。上半部外面は刷毛調整を施し、内面は左から右方向もしくは右から左方向の篋削りを施す。口縁部は端部を垂直に

摘み上げるか、内側へ摘み上げるか、方形を呈する。下半部外面は刷毛調整を施し、内面は下から上方向もしくは上から下方向の筥削りを施す。器形は球形か長胴気味で、底部は丸底である。



図2 畿内系甕の諸類型 0 20 cm

#### 【備前】

分析の対象とした資料は岡山市百間川沢田，百間川原尾島，百間川米田，鹿田の各遺跡からの出土資料105点についてである。

甕の上半部外面は刷毛調整を施し、内面は左から右方向もしくは右から左方向の筥削りを施す。削り方向の比率は圧倒的に左から右方向が優勢である。僅かではあるが上半部まで縦方向に削り上げるものもある。口縁部は複合口縁を呈し、口縁部外面に櫛描沈線を施し、端部を垂直に摘み上げる。下半部外面は細かな縦方向の筥磨き調整を刷毛調整後施し、内面は下から上方向もしくは上から下方向の筥削りを施す。筥磨きが上半部まで及び刷毛調整を消し切ってしまう場合もある。器形は長胴気味で、底部はやや尖り底を志向する丸底である。

#### 【備中】

分析の対象とした資料は岡山市足守川加茂，足守川矢部南向，津寺の各遺跡からの出土資料209点についてである。

甕は前述備前地域のものと同様の様相を示す。

#### 【備後】

良好な資料に恵まれていない。しかしながら、僅かな資料は散見できる。広島県福山市石槌権現遺跡群C地点37土器溜出土資料をこの時期の在地系



甕の典型に比定するとすれば(伊藤・三枝 1985, 大久保 1996)<sup>3)</sup>、以下のような特徴を有する。伊藤実・三枝健二はこの甕を弥生時代後期後葉のものとして、その時期の甕の特徴を「口縁端部外表の凹線文が中葉のものに比べて著しく退化し、胴部卵形を呈し、底部は著しく矮小化して、凸レンズ状に下方に張り出す、内底面に指頭圧痕をのこすものが存在する」としている。さらに付言すれば内外面の調整は備前・備中と同様であるが、ただ口唇部のみがやや幅を持っている。

#### 【美作】

この時期の良好な資料に乏しい。ただ津山市大田十二社遺跡(中山編 1981)の資料からこの地域の在地甕を推察するならば、過渡期の土器は大田十二社5式期に相当すると考えられる。この時期に比定される甕は、器形は長胴気味で、上半部外面は刷毛調整を施し、内面は左から右方向もしくは右から左方向の筥削りを施す。口縁部は端部が丸く収まる。下半部外面は上半部同様に刷毛調整を施し、下半部内面は下から上方向の筥削りを施す。完形資料が少ないが、当地域の在地系甕は現時点では上記の様な特徴を持つことが想定される。

#### 【因幡】

分析の対象とした資料は鳥取市大柵, 岩吉, 東伯郡羽合町長瀬高浜の各遺跡からの出土資料36点である。甕の上半部外面は刷毛調整を施し、内面は左から右方向もしくは右から左方向の筥削りを施す。削り方向の比率は左から右方向が少し優勢である。口縁部は吉備のものよりもやや口唇部幅のある複合口縁を呈し、端部は方形もしくは円形を呈する。下半部外面は刷毛調整を施し、下半部内面は下から上方向の筥削りを施す。器形は長胴気味で、底部は若干尖り底を志向する丸底である。

#### 【伯耆】

著名な米子市青木遺跡が所在する地域ではあるが、甕の形態全体が判別できるような、良好な資料に恵まれていない。ただ断片的な資料から判断

するならば、出雲の様相に類似している。

#### 【出雲】

分析の対象とした資料は出雲市山持川川岸遺跡、八束郡鹿島町南講武草田遺跡からの出土資料27点である。甕の上半部外面は刷毛調整を施し、内面は左から右方向もしくは右から左方向の篋削りを施す。削り方向の比率はほぼ半々である。口縁部は吉備のものよりもやや口唇部幅のある複合口縁を呈し、端部は方形を呈する。下半部外面は刷毛調整を施し、下半部内面は下から上方向の篋削りを施す。器形は長胴気味で、底部はやや尖り底を志向する丸底である。山陰地方の在地系甕はほぼ同様の器形を呈し製作技術にも大差はないようである。

#### 【石見】

過渡期の資料は良好なものはない。『弥生土器の様式と編年』でのV-4期の資料を参考にしてみると、「複合口縁をもつ甕は壺と同じように口縁部が薄くつくられ（底部は）、ほとんど丸底に近いものが多い」（松本1992）とされている。出雲地域に類似した形態と思われる。

#### 【安芸】

良好な資料は比較的少ない。東広島市西本6号遺跡、原1号遺跡等の資料と在地土器の編年(植田1987)から判断して、在地系甕の設定を行った。この結果から窺えるのは、甕の上半部外面は刷毛調整を施し、内面は左から右方向もしくは右から左方向の篋削りを施す。削り方向の比率は左から右方向がやや優勢である。口縁部は吉備のものよりもやや口唇部幅のある複合口縁を呈し、端部は方形もしくは円形を呈する。下半部外面は刷毛調整を施し、下半部内面は下から上方向の篋削りを施す。器形は長胴気味で、底部はやや尖り底を志向する丸底である。

#### 【周防】

山本一朗の設定した編年の10式前後が過渡期に相当する(山本1981)。この地域に於いても現在の所、まとまった資料は出そろっていない。山本

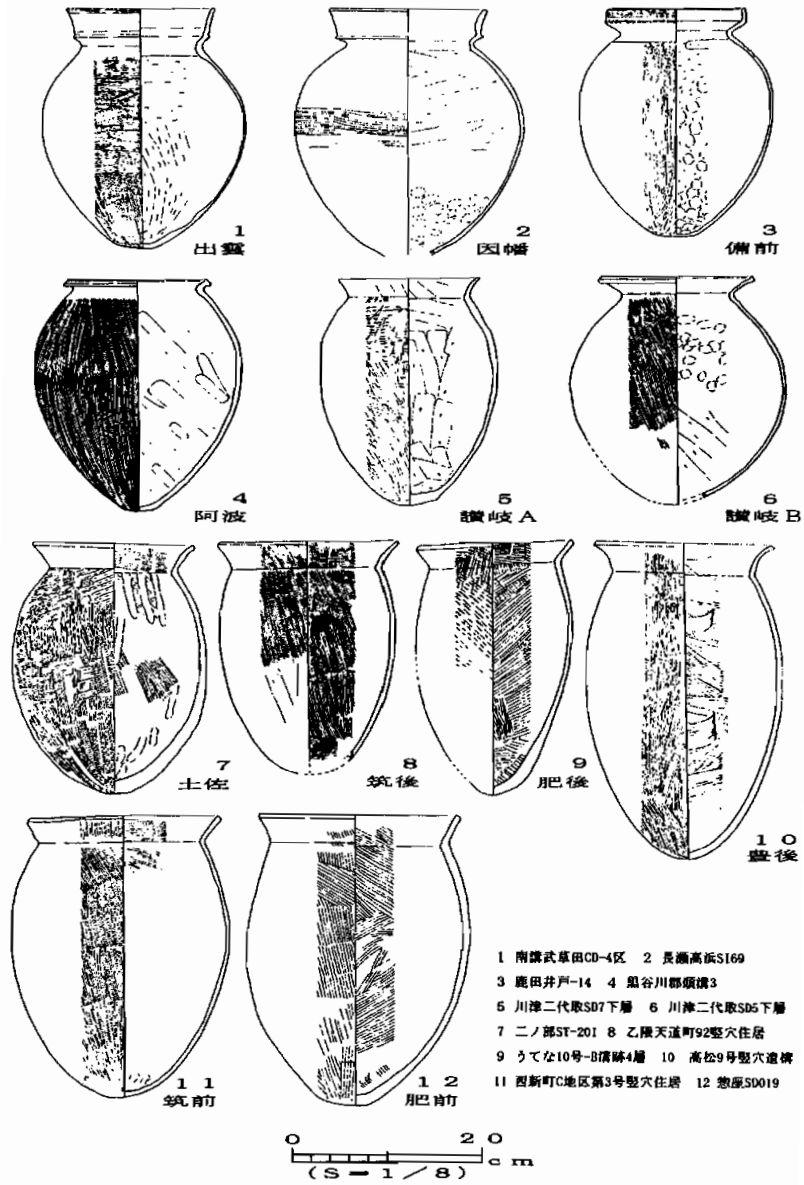


図3 各地域の在地系壺

によればこの地域の甕は「長胴傾向のみられる倒卵形器体に外反する長めの口縁部を付するもので、平底のものはほとんどなく、丸底もしくは尖り気味の底部を持つ。器面にはハケメが顕著」としている。付言するならば、器面の内外面ともに刷毛調整を施している。

#### 【長門】

良好な資料はこの地域でも比較的少ない。前述の山本によれば(山本1981)、この地域の甕は「くの字形の口縁部を持つ甕も多い。いくぶん長胴化傾向を見せるものもあり、丸底のものも多い。口縁の稜線や頸部の締まりはにぶく、土師器に通じる点も濃厚である。タタキメを残すものもあると思われる」としている。

#### 【阿波】

他地域にも移動が認められる、所謂「東阿波型」甕(菅原1986)が、在地系甕と認定できる。

分析の対象としたのは徳島市黒谷川郡頭遺跡、庄・鮎喰遺跡からの出土資料22点である。

甕の上・下半部外面は刷毛調整を施し、内面上半部は刷毛調整が主体であるが、上半部まで縦方向に削り上げるものもある。口縁部は大きく外反し、端部を垂直に摘み上げる。下半部内面は下から上方向の篋削りを施す。器形はやや長胴で、底部は尖り底を志向する。

#### 【讃岐】

讃岐地域の在地系甕には大別して、A・B二つの系統が存在することが、予想される。いずれも前時期から継続して存在している。

坂出市下川津、川津二代取、川津下樋の各遺跡出土資料22点を検討した。その結果、甕Aは、上半部外面は右上がり方向か平行タタキを施し、内面は撫でを施す。口縁部は端部を丸く収める。下半部外面は刷毛調整を施し、内面は下から上方向の篋削りを施す。器形は長胴で楕円形を呈す。底部は丸底である。もう一つの系統の甕Bは、甕の上・下半部外面は刷毛調整を

施し、上半部内面は撫で調整を施す。口縁部は大きく外反し、端部を垂直に摘み上げる。下半部内面は下から上方向の篋削りを施す。器形は球形を呈する。底部は尖り底を志向する。先述の阿波型甕に特徴は類似している。形態的特徴は下川津B類の系譜を引くもので、下川津C類と仮称されるタイプ(木下 1995)に相当する。

#### 【伊予】

当時期に該当する資料は少ない。愛媛県松山市宮前川遺跡の資料と、弥生時代後期の編年(梅木 1991)を参考としながら在地系甕を設定した。

甕の上半部外面は右上がり方向か平行のタタキを施したままか、タタキ後刷毛調整をする。上・下半部内面は撫でを施す。下半部は刷毛調整をする。口縁部はやや外反し、端部は丸か方形を呈す。器形はやや長胴で、底部は尖り底を志向する。

#### 【土佐】

弥生時代後期より甕外面のタタキ技法が出現し、移行期にまで継続することが知られる(岡本 1982)<sup>4)</sup>。

高知県高岡郡佐川町二ノ部遺跡、香美郡野方町深淵遺跡、同郡土佐山田町ひびきのサウジ遺跡の資料28点を検討した。

甕は上半部外面は右上がり方向か平行のタタキを施す。上・下半部内面は撫でを施す。下半部は刷毛調整を施す。口縁部は外反し、端部は丸く収まる。器形は長胴気味で、底部は尖り底を志向する。

#### 【豊前】

分析の対象として福岡県北九州市カキ遺跡、行橋市津留遺跡出土の資料12点を扱った。

甕は上半部外面及び内面は刷毛調整を施す。外面下半部は刷毛調整を施すか強い板撫でによって削り状態を呈す。口縁部は外反し、端部は丸く収まるか面を持って方形を呈す。器形は長胴気味で、底部は丸底である。

#### 【豊後】

分析の対象としたのは大分県大分市守岡遺跡、大野郡犬飼町高松遺跡出土の資料12点である。

この地域の甕は豊前と共通する要素を多く持っている。甕の上半部外面及び内面は刷毛調整を施す。外面下半部は刷毛調整を施す。僅かではあるが、外面下半部撫でを施すものもある。下半部内面は口縁部は外反し、端部は丸く収まるか面を持って方形を呈す。器形は長胴で、底部は尖り底を志向するものが多く見られる。

#### 【筑前】

北部九州地域において移行期の在地土器が最も多く出土している。分析の対象としたのは福岡県福岡市西新町遺跡、那珂遺跡、筑紫郡那珂川町松木遺跡、糸島郡志摩町御床松原遺跡、前原市三雲遺跡出土の資料60点である。

甕の上半部外面及び内面は刷毛調整を施す。外面下半部は刷毛調整を施す。外面下半部を強い板撫でによって削り状態になったものも多い。口縁部端部はほとんどが面を持って方形を呈す。器形は長胴で、底部は丸底である。

#### 【筑後】

分析の対象としたのは福岡県小郡市乙隈天道町遺跡出土の資料26点である。

甕の形態・調整等は筑前とほぼ同様であり、大きな差異は認められない。

#### 【肥前】

分析の対象としたのは佐賀県佐賀郡大和町惣座遺跡、諸富町村中角、畑田、土師本村、三重櫨ノ木遺跡出土の資料21点である。

甕の上下半部外面及び内面は刷毛調整を施す。上半部外面はタタキ後刷毛調整されたもので、希にタタキ調整のままのものが見られる。口縁部端部は面を持って方形を呈す。器形は長胴で、底部は丸底である。

#### 【肥後】

分析の対象としたのは熊本県山鹿市方保田東原遺跡、菊池郡七城町うてな遺跡、阿蘇郡阿蘇町狩尾・前田、池田・古園遺跡出土の資料33点である。

甕の上半部外面は左上がり方向か平行のタタキを施したままか、タタキ後刷毛調整をする。下半部は刷毛調整をするか刷毛後撫で消すものがある。内面は全て刷毛調整を施すものと、下半部のみ撫で消すものがある。口縁部はやや外反し、端部は面を持って方形を呈す。器形は長胴で、底部は丸底で尖り底を志向するものもある。

以上の結果を庄内式甕と在系甕との関係を中心に見てみる。内面篋削りをするのは、畿内以外では出雲・因幡・備前・備中・阿波・讃岐がある。プロポーシオンでは、やはり出雲・因幡・備前・備中・阿波・讃岐Bが類似する。その他の地域では長胴が主体となる。口縁端部形態では、阿波・讃岐Bに近い。これら甕の形態や制作技術が果たして畿内からの影響か、もしくは畿内へと影響を与えたものかは、今後の課題である。

#### IV. 所謂「畿内系甕」の分析

##### IV-1 本分析の目的

これまで前章で設定した畿内系甕は伝統的第V様式系から庄内式系、そして布留式傾向甕を経て完成された布留式系へと、甕の形態及び製作技術の変化が時間的推移とともに進行していくと考えられてきた。しかし近年は近畿地方中河内地区に於いても、これらの時間的推移が円滑に行われることはなく、むしろもっとゆるやかに曖昧な形で変化していつているのではないかと考えられるようになってきた。こういった考えの背景には、米田敏幸の想定するように(米田 1990)、庄内式期の甕の中にも布留式系甕が既に存在しており、また布留式傾向甕と伝統的第V様式系甕が共存しているという場合も現在では事例が多く認められるようになったことがある。

また畿内地方以外でも、汎日本的に弥生時代終末から古墳時代初頭にかけて、畿内にその製作技術の起源をもつ甕は、多大なる影響を与えるとい

える。しかしながら各地域では前章で見たように弥生時代後期の地域性を継承した土器組成・土器製作技術の伝統が強く残る。甕においても例外ではない。だがほとんどの地域では、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけてのインパクトを受け、定型化した布留式段階にはそれまでの地域性を捨て去り、畿内の土器組成へといったんは転化する。

その際各地域ごとで、こうした外来系土器の受け入れられ方の違いが見られる。次節では、西日本地域の畿内系土器の動態をより巨視的に検討し、そうした畿内系土器のうち庄内式系甕が近畿地方のどこからもたらされたのかを考えてみたい。つまり各地域にもたらされた畿内系土器ははたして本当に畿内中枢部のものがダイレクトに伝わったのか、または大和や播磨などの畿内縁辺部で生成されたものや技術が伝わったのかを検証してみたい。

#### IV-2 各地域出土畿内系甕の分布

弥生時代終末から古墳時代初頭にかけては畿内系・吉備系・山陰系・四国系・近江系・北陸系・東海系といった各地域特有の形態を持つ土器の、土器製作技術に関する情報の伝達という場合も含めて、頻繁な移動が見られる。これらの移動する土器のうちここでは畿内系甕（伝統的Ⅴ様式系甕・庄内式系甕・布留式傾向甕及び初期布留式甕）の分布を見ていきたい。

本稿では、Ⅲ章で取り扱った地域において出土した畿内系甕を集成した（図4・5）。

この結果を総括してみると、特に畿内系甕が頻繁に出土するのは、備前・備中地方の岡山平野周辺地域と、筑前地方の博多湾沿岸地域、そして肥前地方の佐賀平野一帯であることが看取される。

形態別では、伝統的Ⅴ様式系甕は主として、備中地域に量的に多く見られる。また山陰地方では量的に、伝統的Ⅴ様式系甕が最も多く出土している。長門地域では伝統的Ⅴ様式系甕が多く出土しているが、在地系甕の影響がある可能性もある。



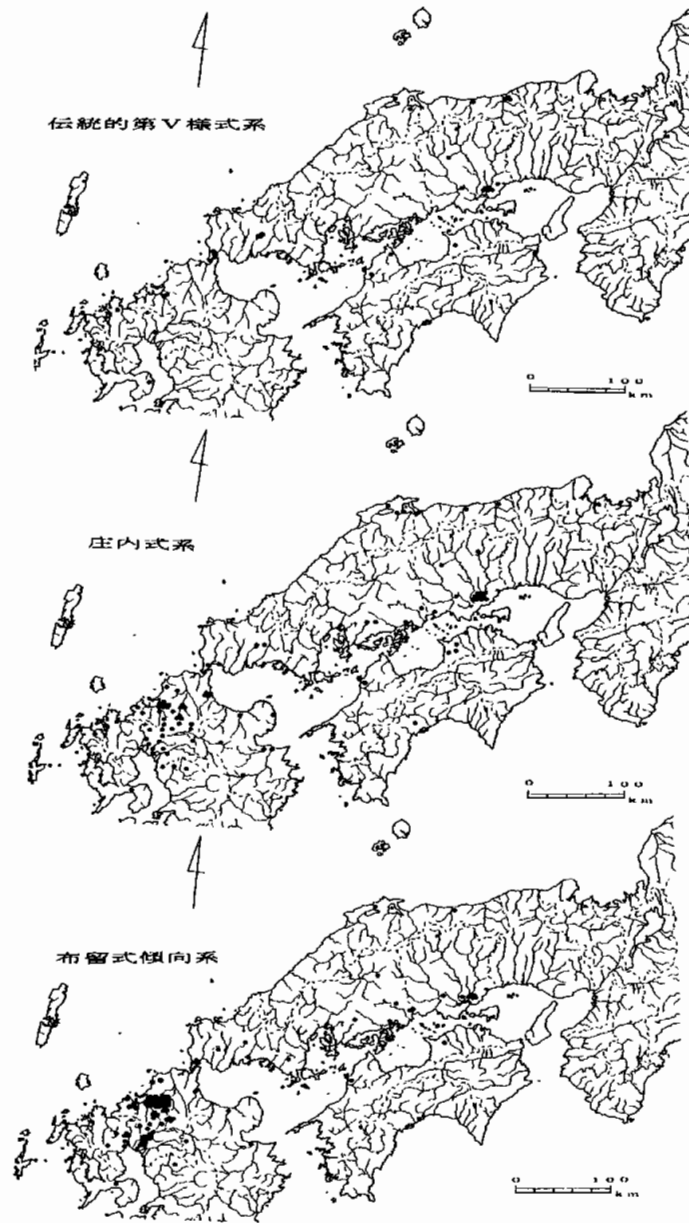


図4 西日本における畿内系壘の分布

庄内式系甕は備前・備中地方と、長門地方、豊前地方、筑前地方博多湾周辺、筑後地方小郡市周辺、肥前地方の佐賀市域と唐津市域、肥後地方の菊池川流域に多く見られる。

布留式傾向甕及び初期布留式甕については、他の甕同様に備中地域で多く見られる。また備後地域にもこの類の甕が多く分布している。長門地方・肥後地方にも見られる。筑前地方・筑後地方・肥前地方の佐賀平野一帯では、大量のこの種の甕が出土している。この種の甕は畿内系甕としているものの内最も量的に多い。

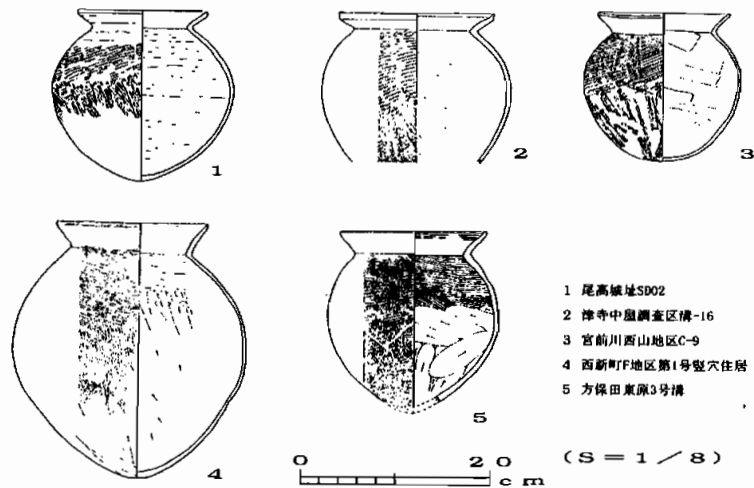


図5 各地域出土の庄内式系甕

#### IV-3 技術から見た畿内系甕の分析

庄内式系甕のそれぞれについて、前章で設定した分類基準に従って分析を行った。ただしここでは繁雑さを避けるため、b1類とb2類をひとまとめとしてb類とした。

本節では前節での分類結果を製作技術の観点から分析し、その空間的差異の傾向を提示したい。

分析の視点は以下の通りである。甕外面の叩きの方向・内面の調整という視点に加えて、口縁端部形態についてその空間的様相を見る。基本的分類基準は前章で示した通りである。但し各地域では破片資料が多いため、これら破片資料も十分に活用可能にするために、上半部についての形態分類に限定して行った。特に外面調整、内面調整、口縁端部形態について見てみたい。

#### 【口縁端部形態】

口縁端部形態については摘み上げるものⅠ類、丸く収まるものⅡ類、内側へ折り肥厚するか、内側へと摘み上げるものⅢ類である。

Ⅰ類は全体で114個体ある。地域別での内訳は備前6・備中14・備後3・美作1・因幡1・伯耆3・出雲5・長門5・讃岐1・土佐1・豊前3・豊後4・筑前47・筑後5・肥前10・肥後5である。

Ⅱ類は全体で15個体ある。地域別では備前2・備中15・因幡2・伯耆1・出雲5・安芸2・長門7・讃岐5・伊予4・豊前11・豊後4・筑前56・筑後13・肥前13・肥後16である。

Ⅲ類は、存在しなかった。

#### 【外面調整】

外面の叩きの方向については、右上がりのものA1類、平行のものA2類、左上がりのものA3類である。

A1類は全体で142個体ある。地域別でその様態を見ると、備前5・備中12・因幡2・伯耆1・出雲8・安芸1・長門8・讃岐1・伊予3・土佐1・豊前12・筑前61・筑後8・肥前13・肥後6である。

A2類は全体で88個体ある。地域別での様態は備前3・備中8・備後3・美作1・伯耆1・出雲1・安芸1・長門3・讃岐1・伊予1・豊前1・豊後7・筑前28・筑後10・肥前7・肥後12である。

A3類は全体で37個体ある。地域別では備中7・因幡1・伯耆2・長門1・讃岐4・豊後1・筑前15・肥前3・肥後3である。

**【内面調整】**

内面の調整については、筒削りを施すもので削りの方向が左から右方向のものa1類、筒削りを施すもので削りの方向が右から左方向のものa2類、削りを施さず刷毛もしくははなで調整をするものb類についてである。

a1類は全体で49個体ある。地域別では備前2・備中9・因幡1・伯耆3・出雲3・讃岐1・伊予1・豊前3・筑前20・筑後1・肥前5である。

a2類は全体で46個体ある。地域別では備前5・備中11・備後2・美作1・因幡1・伯耆1・出雲1・安芸1・長門3・豊前2・豊後5・筑前6・筑後2・肥前3・肥後2である。

b類は全体で171個体ある。地域別では備前1・備中8・備後1・因幡1・出雲1・安芸1・長門9・讃岐5・伊予3・土佐1・豊前8・豊後3・筑前80・筑後15・肥前15・肥後19である。

次に前節で指摘した特に甕が多く分布する地方について、その様態を見てみたい(図6)。

**【備中】**

口縁端部形態は55.9%がI類で、II類が44.1%である。外面タタキの方向については、A1類は44.4%で、それ以外のA2類は29.6%、A3類は25.9%が中心になる。内面調整はa1, a2, b類がほぼ同じ割合である。

**【筑前】**

口縁端部形態は45.6%がI類で、II類が54.4%である。外面タタキの方向については、A1類は58.7%で中心を占め、それ以外のA2類は29.6%、A3類は14.4%である。内面調整はb類が最も多く、次いでa1, a2類の順である。

**【肥前】**

口縁端部形態は43.5%がI類で、II類が56.5%である。外面タタキの方向については、A1類は56.5%で中心をなし、それ以外のA2類は30.4%、A3類は13.0%が中心になる。内面調整はb類が65.2%で最も多く、次いでa1、

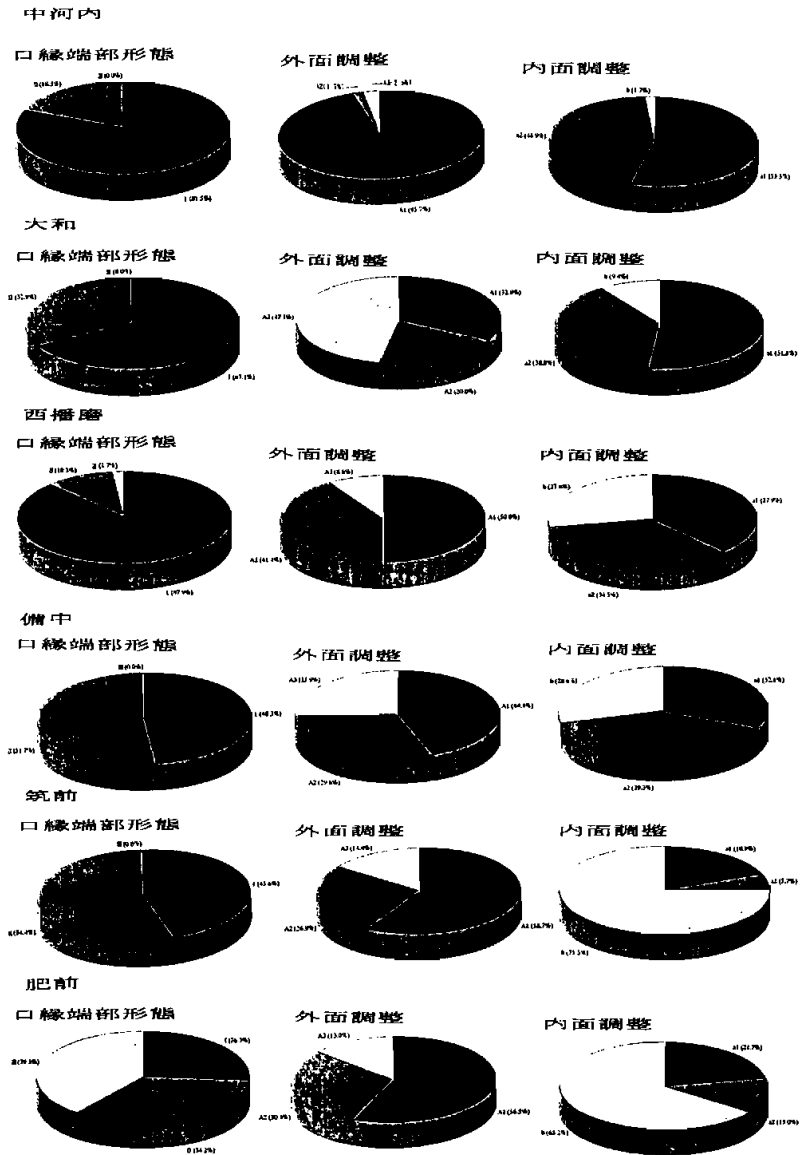


図6 各地域の畿内系甕の分析結果

a2類の順である。

#### IV-4 畿内地方中枢部及び周辺部の様相と検討

近畿地方のうち、畿内という限定された地域においてでさえ、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての土器様相は、各地区で多様である。前述の伝統的Ⅴ様式甕・庄内式甕・布留式傾向甕・布留式甕のうち特に庄内式甕の生産基盤は中河内地区に存在したといえる。しかしながら、これらの地域に隣接する諸地域においても、庄内式甕の製作技術を導入し、独自の庄内式甕を量的にまとめて生産していたと考えられる地域がある。一つは大和地方であり、今一つは播磨地方西部地区である。一部では庄内式甕の起源をこの西播磨に求める考え（米田 1992a, 1992b, 岸本 1995）もあるが、ここでは便宜的に畿内中枢部（中河内）とその周辺部（大和・西播磨）という枠組みで捉えたい。<sup>9)</sup> 前節での分類基準にならい、上半部の形態分類を更にこの3地域で試みてみたい。以下各地域について述べる（図6）。

##### 【中河内】

分析の対象とした資料は、大阪市では城山、東大阪市では西岩田、瓜生堂、若江北、鬼塚、西の口、八尾市では萱振、八尾南、成法寺、跡部、東郷、中田、久宝寺南、久宝寺、木の本、美園、東弓削、小坂合の各遺跡出土資料897点についてである。

分析の結果は、外面タタキの方向はA1類が95.7%で中心を占める。内面調整はほとんど半々割合で、a1類（53.3%）と、a2類（44.9%）とがある。口縁端部形態は全体の81.5%がI類である。

##### 【大和】

分析の対象とした資料は、奈良県桜井市纏向、橿原市藤原京下層、藤原京条坊関連、御所市檜原、天理市平等坊・岩室、柳本、和爾・森本、磯城郡田原本町矢部の各遺跡出土資料90点についてである。

分析の結果は、口縁端部形態は67.1%がⅠ類で、Ⅱ類が32.9%ある。外面タタキの方向はA1類が32.9%と少なく、それ以外のA2類（20.0%）・A3類（47.1%）が中心になる。内面調整はa1類がやや優勢である。

#### 【西播磨】

分析の対象とした資料は、兵庫県姫路市長越、龍野市尾崎、揖保郡太子町上溝の各遺跡出土資料46点である。

分析の結果は、口縁端部形態は87.9%がⅠ類でそれ以外は少数である。外面タタキの方向はA1類が50.0%あるものの、それ以外のA2類（41.4%）・A3類（8.6%）も合わせて半数ある。内面調整はa1, a2, b類の三者はほぼ同じ程度存在する。

これらの資料の分析結果から、中河内を庄内式甕の生産基盤の中心と仮定した場合、その周辺部で生産されていた庄内式甕はやや中心とは異なった形状をなしているといえることが解った。

分析の項目の内、口縁端部形態については中心同様に、周辺部でも上へ積み上げると意識がなされている。しかしながらそれ以外の外面のタタキの方向や、内面調整については中心部の規範が崩れている傾向が見られる。

以上のことから中河内の庄内式甕を（近畿地方）中心部タイプの庄内式甕とし、大和・西播磨の庄内式甕を（近畿地方）周辺部タイプの庄内式甕と以下呼ぶことにしたい（図7）。

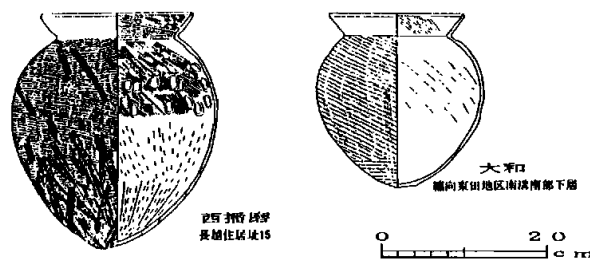


図7 畿内周辺部産の庄内式甕

## V. 畿内系甕移動の意義

ここではIV章での各地域における畿内系甕及び、畿内中心・周辺部での分析結果を総合的に検討する。次にその結果から畿内系甕の移動という現象について、その背景を考えてみたい。

IV章3節で特に検討した備中・筑前・肥前の三つの地方の庄内式系甕は、IV章4節で設定した近畿における庄内式甕の二つのタイプ、つまりが中心部と周辺部のタイプのいずれに相当するのであるかを考えてみたい。

これらの三地方の形態的特徴からすれば、多少の様相の差は各地であるものの、概して周辺部タイプに類似していることが見て取れる。ただ周辺部タイプと大きく異なった傾向を示したのは、口縁端部形態についてである。周辺部タイプでは端部を垂直に摘み上げるという規範が重視されていたのに対して、各地の甕の口縁端部は丸く収めるものが多い。しかしながら、垂直に摘み上げることについては、やはり執着していることが窺える。

畿内中枢部からの直接の搬入土器の胎土中に花崗岩組成の角閃石が多く含まれる茶褐色の胎土を呈するものは、福岡県宗像郡津屋崎町今川遺跡包含層、佐賀県土師本村遺跡SK9出土資料等が知られる程度である（米田1993）。北部九州に関しては畿内中枢部からの甕そのものの移動は、ごく稀であったことが垣間みれる。

一方備中地方では、角閃石を胎土に多く含む甕は、津寺遺跡西川調査区土壙墓-6、中屋調査区溝-4、溝-16、足守川加茂B遺跡竪穴住居65、斜面堆積等で確認されている。地理的に近畿地方と距離が近いためであるとも理解できるが、この時期中河内一帯から同時期の備前・備中地方の在処系甕が大量に出土することを考慮すれば<sup>9)</sup>、相互間の頻繁な交流が窺える。

逆に畿内中河内地区ではほんの少量の北部九州系甕の出土しか認められない<sup>10)</sup>。このことは前述の北部九州において中河内産の庄内式甕が少量しか出土していないという現象と符合する。



また九州地方出土の庄内大和型甕とされたもののうち、搬入品とされるものは胎土の砂礫から見ると総て播磨の姫路平野から搬入されたもので、大和から搬入されたものではない(米田 1993)とされる。しかしながら、畿内中枢部の庄内式甕の胎土のように角閃石が多く含まれるといった肉眼観察で容易に判別出来るような胎土で、大和や西播磨の庄内式甕は成り立っていない。そういった現状から判断すると、総てが西播磨からの搬入品であるという説を積極的に支持出来ない。

以上のような議論を踏まえて、ここで一つの仮説を立ててみたい。各地へもたらされた庄内式甕そのもの、製作技術に関する情報(人の移動・情報の移動)をすべて含めて考えた場合、吉備地方以外へと移動したのは畿内中心部タイプに関するものは非常に少なく、主流を占めていたのは、周辺部タイプに関するのみであったと言えるのではなかろうか(図8)。

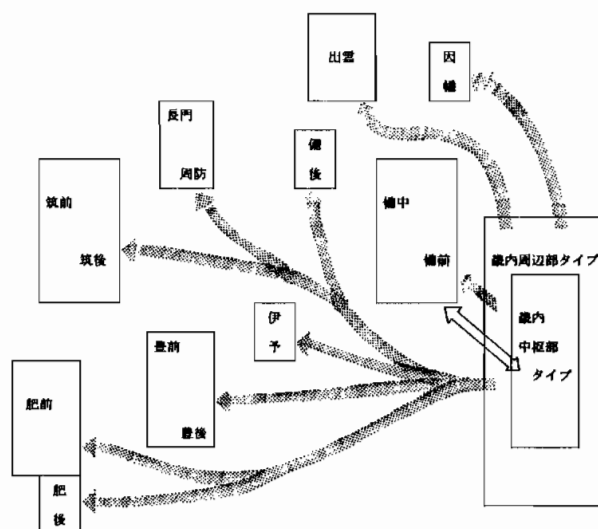


図8 製作技術からみた畿内系甕の出自概念図

また米田敏幸は西川修一が南関東の伝統的のV様式系甕は、畿内中枢部

からはじきだされた人々によってもたらされたとする見解(西川 1991)を引きながら、九州の伝統的Ⅴ様式系甕も例外ではないように思えるとしている(米田 1993)。これらのものと情報の動きの背景には甕の機能的側面からというよりも、当時の社会変動<sup>9)</sup>に起因すると考えるほうが理解し易いと言えよう。

## VI. まとめ

以上、西日本各地域における弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての在地区系甕を設定し、古墳時代に入ってから弥生時代の在地区系甕の形態や製作技法を踏襲していることを確認した。またこの作業に伴って、近畿地方中河内地区の伝統的Ⅴ様式甕、庄内式甕、布留式傾向甕のそれぞれについて形態的・技術的特徴を決定し、本稿における「畿内系甕」の定義をおこなった。

次にこの定義に基づいて、西日本各地域の畿内系甕を集成し、その分布を概観し、特に庄内式系甕について形態分類し近畿地方中河内、西播磨、大和の庄内式甕と比較を試みた。

これらの作業の結果から吉備へは中河内の庄内式甕に関する情報が多くもたらされるのに対して、北部九州へは西播磨・大和といった畿内周辺部の庄内式甕に関する情報がもたらされた可能性が高いことがわかった。このことは、甕の機能的側面よりも当時の社会変動による結果ではないかとした。

今回は西日本の庄内式系甕の分析結果のみを提示するに止まったが、稿を改めて甕以外の畿内系土器の移動についてや、東日本の畿内系甕の製作技術の出自、西日本の庄内式系甕以外の畿内系甕の製作技術の出自についても検討していきたい。

本稿は平成7年度に奈良大学大学院に提出した、修士論文『土器製作技

術と弥生社会の終焉』の第3章をもとに大幅に修正・加筆したものである。本文中敬称は省略させていただいた。また掲載土器は各報告書より作成した。

謝辞 修士論文作成時には、資料実見等で多くの方々よりご教示・ご協力を賜った。また分析データとして多くの報告書を参考とさせて頂いた。しかしながらいずれも紙幅の都合上、割愛させて頂いた。ご寛容を乞う次第である。

本稿作成に関して水野正好先生・酒井龍一先生・近藤義郎先生のご指導を賜った。また本稿作成には特に以下の諸氏にお世話になった。記して感謝したい（順不同・敬称略）。

市村慎太郎, 岩橋孝典, Walter Edwards, 小田和利, 甲斐昭光, 蒲原宏行, 久住猛雄, 小林健二, 杉本厚典, 瀬口真司, 田中清美, 田畑直彦, 次山淳, 寺井誠, 中川寧, 松藤暢邦, 松宮昌樹, 溝口孝司, 三好孝一, 吉田広, 吉田和彦, 吉留秀敏, 若林邦彦, 京都弥生文化談話会の諸学兄

(文化財史科学専攻博士後期課程1年)

#### 註

- 1) 九州地方では柳田 1982, 1991・常松 1984, 1985・蒲原 1989, 1991・玉永 1978, 1989・野田 1982・石橋 1983・古庄 1989等、山陰では藤田 1979・赤澤 1985・岩橋 1994a・中川 1996等、四国地方では菅原 1986・大久保 1990, 1993・廣田 1994等、中国地方では高橋 1988・山本 1988等がある。
- 2) この分析方法は深澤芳樹の方法をそのまま援用したものである（深澤 1986）。
- 3) 伊藤実・三枝健二はこの土器を弥生時代後期後半としたが、大久保徹也は一段階下らせて、弥生時代後期終末のものとしている。本稿ではこの土器を後期終末のものとして扱った。
- 4) 岡本健児はタタキ技法は畿内第V様式併行期に、畿内から阿波を経由せず直接土佐にもたらされたか、紀伊あたりからの流入を想定した。
- 5) ここでは純粹に庄内式甕の分布の中心であるという意味で「中心」、「中樞」という語を用いている。本来甕の在り方が直接には政治的議論へはつながらないと考える。

- 6) 吉備のこの時期の在り地甕は、九州地方では福岡県比恵、大分県下藤、佐賀県村中角遺跡など数遺跡でしか出土していない。吉備との交流の希薄さを示している。
- 7) 大阪市加美遺跡の溝より、未発表資料ではあるが西新町式の甕が1点出土している。この資料に関しては、大阪市文化財協会・田中清美氏のご厚意により実見させていただいた。
- 8) 社会学者富永健一は、社会変動の大きさをあらわす四つの指標として、①変動の空間的なひろがり②変動の時間的なひろがり③変動の強さ④変動の急激性をあげている（富永 1965）。

## 《引用・参考文献》

- 赤沢秀則 1985「出雲地方古墳出現前後の土器編年試案」『松江考古』6 松江考古学談話会  
1992『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書 南講武草田遺跡』鹿島町教育委員会
- 安達厚三・木下正史 1974「飛鳥地域出土の古式土師器」『考古学雑誌』60-2 日本考古学会
- 阿部嗣治 1985「土器の移動に関する一考察—庄内式土器を中心として—」『財団法人東大阪市文化財協会紀要』I（財）東大阪市文化財協会
- 石井洋二郎 1993『差異と欲望』藤原書店
- 石橋新次 1983「中九州における古式土師器」『古文化談叢』12 九州古文化研究会  
1993「筑後・肥前・肥後における庄内式土器（有明海沿岸地域）」『考古学ジャーナル』363 ニュー・サイエンス社
- 伊藤実・三枝健二 1985「備後南部地域」『広島県の弥生土器』広島県立歴史民俗資料館
- 井上和人 1983「布留式」土器の再検討『文化財論叢』同朋舎
- 井上裕弘 1991「北部九州における古墳出現前後の土器群とその背景」『児島隆人先生喜寿記念論集古文化論叢』児島隆人先生喜寿記念事業会
- 岩橋孝典 1994a「出雲における庄内式併行期の様相」『庄内式土器研究』Ⅷ 庄内式土器研究会  
1994b「山陰地域内出土の外来系土器について」『石田遺跡』島根県教育委員会
- 植田千佳穂 1987「(4)まとめ」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅳ（財）広島県埋蔵文化財調査センター

- 梅木謙一 1991「松山平野の弥生後期土器－編年試案」『松山大学構内遺跡－第2次調査』松山市教育委員会・(財)松山市埋蔵文化財センター
- 大久保徹也 1990「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」『下川津遺跡』(財)香川県埋蔵文化財調査センター  
 1993「讃岐地方における古墳時代初頭の土器について－下川津VI式以降の様相－」『財団法人香川県埋蔵文化財センター研究紀要』I (財)香川県埋蔵文化財調査センター  
 1996「煮沸形態からみた地域圏」『古代学協会四国支部第10回松山大会資料』
- 大滝雅嗣・須藤敏子 1986『宮前川』愛媛考古学協会
- 小原貴樹編 1997『尾高城址発掘調査報告』尾高城址発掘調査団・米子市教育委員会
- 岡本健児 1982「南四国における叩目のある弥生土器と土師器」『森貞次郎博士古希記念古文化論集』下 森貞次郎博士古希記念論文集刊行会
- 置田雅昭 1982「古墳出現期の土器」『えとのす』19新日本教育図書
- 蒲原宏行 1989「北部九州出土の畿内系二重口緑壺－その編年と系譜をめぐって－」『古文化談叢』20(中)九州古文化研究会  
 1991「古墳時代初頭前後の土器編年－佐賀平野の場合－」『調査研究書』16 佐賀県立博物館・佐賀県立美術館
- 川上秀秋 1995『北九州市埋蔵文化財調査報告書第161集カキ遺跡(弥生時代編)』(財)北九州市教育文化事業団
- 岸本道昭 1995「庄内播磨起源論」『庄内式土器研究』X庄内式土器研究会
- 木下晴一 1995『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査報告16川津二代取遺跡』(財)香川県埋蔵文化財調査センター
- 久住猛雄 1995a「古墳時代初頭前後の土器の生産と流通－北部九州の土器相を分析して－」『史観』132 早稲田大学史学会  
 1995b「古墳時代初頭前後の土器生産と様式変容の背景」『大分県考古学会例会発表資料』
- 桑原隆博 1996「広島県内出土の布留系甕について」『研究輯録』VI(財)広島県埋蔵文化財調査センター
- 古庄浩明 1989「中九州における古式土師器の研究－白川・緑川水系を中心に－」『國學院大學考古学資料館紀要』5 國學院大學考古学資料館
- 児玉真一編 1989『福岡県文化財調査報告書第86集 乙隈天道町遺跡』福岡県教育委員会
- 児玉幹夫 1994「社会的認識としての分類－ブルデューのディスタンクシオン論－」『関東学院大学文学部紀要』71 関東学院大学文学部

- 小松 譲 1993「布留式甕考」『上恒安遺跡』久保田町教育委員会
- 小山田宏一 1982「布留式成立に関する覚え書き」『考古学と古代史』同志社大学考古学シリーズⅠ同志社大学考古学シリーズ刊行会  
1985「布留式における「型」の採用」『考古学と移住・移動』同志社大学考古学シリーズⅡ同志社大学考古学シリーズ刊行会
- (財)鳥取県教育文化財団編 1982『鳥取県教育文化財団調査報告11 長瀬高浜遺跡発掘調査報告書』Ⅳ(財)鳥取県教育文化財団
- 坂本賢三 1982『「分ける」こと「わかる」こと』講談社
- 酒井龍一 1975「和泉における弥生式～土師式土器の移行過程について」『上町遺跡発掘調査概報』和泉市教育委員会  
1976「和泉に於ける「伝統的Ⅴ様式」に関する覚え書き」『豊中・古池遺跡発掘調査概報そのⅢ』豊中・古池遺跡調査会  
1977「古墳造営労働力の出現と煮沸用甕」『考古学研究』24-2 考古学研究会
- 佐々木隆彦 1980「結語」『今光・地余遺跡』東急不動産株式会社  
1984a「松ノ木遺跡群出土土器の展開」『松ノ木遺跡』Ⅰ那珂川町教育委員会  
1984b「古式土師器についての若干の所見－北部九州の外来系甕を中心に－」『塚堂遺跡』Ⅲ 福岡県教育委員会
- 坂本嘉弘編 1988『高松遺跡』犬飼町教育委員会
- 菅原康夫 1986『黒谷川郡頭遺跡』Ⅰ徳島県教育委員会
- 関川尚功 1976「畿内地方の古式土師器」『纏向』桜井市教育委員会
- 高橋 護 1988「弥生時代終末期の土器編年」『岡山県立博物館研究報告』9 岡山県立博物館
- 田崎博之 1983「古墳時代初頭前後の筑前地方」『史淵』120 九州大学文学部
- 高萩千秋 1988『(財)八尾市文化財調査研究会報告15 小坂合遺跡』(財)八尾市文化財調査研究会
- 田平徳栄 1990『佐賀県文化財調査報告書第96集 惣座遺跡』佐賀県教育委員会
- 田中 琢 1965「布留式以前」『考古学研究』12-2 考古学研究会
- 田中裕介・土居和幸 1995「大分県小迫辻原遺跡」『考古学ジャーナル』384 ニュー・サイエンス社
- 玉永光洋 1978「東九州地方における弥生土器研究Ⅰ－安国寺式土器の再検討－」『古文化談叢』5 九州古文化研究会  
1989「大溝出土土器群の時期幅について」『安国寺遺跡』国東町教育委員会

- 玉永光洋・小柳和宏 1993「豊前豊後の庄内式土器」『考古学ジャーナル』363  
ニュー・サイエンス社
- 種浦 修 1989「諸富地域（筑後川下流域）の土器編年」『土師本村遺跡』諸富町  
教育委員会
- 富永健一 1965『社会変動の理論』岩波書店
- 中村幸史郎編 1984『方保田東原遺跡』2 山鹿市教育委員会
- 中山俊紀編 1981『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第10集 大田十二社遺跡』津山  
市教育委員会
- 次山 淳 1993「布留式土器における精製器種の製作技術」『考古学研究』40-2考  
古学研究会  
1995「波状文と列点文」『文化財論叢』Ⅱ 同朋舎
- 都出比呂志 1974「古墳出現前夜の集団関係」『考古学研究』20-4考古学研究会  
1982「畿内第五様式における土器の変革」『小林行雄博士古希記念論  
文集考古学論考』平凡社  
1986「タタキ技法」『弥生文化の研究』3 雄山閣
- 常松幹雄 1984・1985「西北九州における弥生時代後期土器様式の構成に関する一  
研究」前・後『古代』77・80 早稲田大学考古学会  
1993「庄内式土器の時代（玄海灘沿岸）」『考古学ジャーナル』363  
ニュー・サイエンス社
- 常松幹雄・折尾学 1982『高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅱ 西新町遺跡』福岡  
市教育委員会
- 寺井誠 1995「古墳出現前後の竪穴住居の変遷過程－北部九州の事例を基に－」  
『古文化談叢』34 九州古文化研究会
- 寺沢薫 1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県教育委  
員会  
1987「布留0式拡散論」『考古学と地域文化』同志社大学考古学シリーズ  
Ⅲ 同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 中川 寧 1996「山陰の後期弥生土器における編年と地域間関係」『島根考古学  
誌』13島根考古学会
- 西川修一 1991「関東のタタキ甕」『神奈川考古』27 神奈川考古同人会  
1996「再び関東のタタキ甕について」『神奈川考古』32神奈川考古同人会
- 西住欣一郎 1992『熊本県文化財調査報告書第121集うてな遺跡』熊本県教育委員会
- 野田拓治 1982「古式土師器の成立と展開」『森貞次郎博士古希記念古文化論集』  
下 森貞次郎博士古希記念論文集刊行会
- 原田昌則 1993『(財)八尾市文化財調査研究会報告37』(財)八尾市文化財調査

## 研究会

- 廣田佳久 1994「周辺地域における土師器の様相－1・南四国の古式土師器－」  
『(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター研究紀要』1 (財)高知県  
文化財団埋蔵文化財センター  
1995『佐川町埋蔵文化財発掘調査報告第1集岩井口遺跡・二ノ部遺跡、  
城跡』佐川町教育委員会
- 深澤芳樹 1986「弥生時代の近畿」『岩波講座日本考古学』5 岩波書店
- 藤田憲司 1979「山陰「鍵尾式」の再検討とその併行関係」『考古学雑誌』64-4日  
本考古学会
- Bourdieu, P 1982(1990)『La Distinction』Minuit(石井洋二郎訳『ディスタク  
ション』I・II 藤原書店)
- 松下勝編 1978『兵庫県文化財調査報告書第12冊播磨・長越遺跡』兵庫県教育委員会
- 松本岩雄 1992「岩見地域」『弥生土器の様式と編年山陽・山陰編』木耳社
- 溝口孝司 1988「古墳出現前後の土器相－筑前地方を素材として－」『考古学研  
究』35-2考古学研究会
- 柳田康雄 1982「三・四世紀の土器と鏡」『森貞次郎博士古希記念古文化論集』下  
森貞次郎博士古希記念論文集刊行会  
1991「九州」『古墳時代の研究』6 雄山閣
- 山本悦世 1988「鹿田遺跡の弥生～古墳時代初頭の土器」『鹿田遺跡』I 岡山大  
学埋蔵文化財調査研究センター
- 山本一朗 1981「II 防長の土師器」『山口県の土師器・須恵器』周陽考古学研究所
- 横山 滋 1991『模倣の社会学』丸善
- 米田文孝 1982「弥生後期型甕から布留型甕へ」『ヒストリア』97大阪歴史学会  
1993「搬入された古武士師器」『関西大学考古学研究室開設参拾周年記  
念 考古学論叢』関西大学
- 米田敏幸 1981「古墳時代前期の土器について」『八尾南遺跡』八尾南遺跡調査会  
1985「中河内の庄内式と搬入土器について」『考古学論集』考古学を学ぶ会  
1990「中河内の『布留系』土器群について」『考古学論集』3 考古学  
を学ぶ会  
1991「近畿」『古墳時代の研究』6 雄山閣  
1992a「畿内古式土師器に関する二つの仮説」『庄内式土器研究』I 庄内  
式土器研究会  
1992b「庄内播磨型甕の提唱」『庄内式土器研究』II 庄内式土器研究会  
1993「近畿からみた九州の庄内式土器」『考古学ジャーナル』363  
ニュー・サイエンス社



### Summary

In this paper, definitions are first established for the kinai region for styles of pots dating from the end of the yayoi to the beginning of the Kofun Periods; similar definitions are then made for local ceramic styles in other regions in Western Japan. The latter are then analyzed for Kinai traits. It is found that, with the exception of Kaibi, ceramic technology which diffused to the various regions of Western Japan came not from central Kinai(Kawachi), but from the periphery (Yamato, Harima).